

最後の伝令 菊谷栄物語

劇団扉座

言わせて! 今日の芝居

◎五十字劇評 No.57

【六〇代】

▼出発の一日前、恋人に会いに行つた一等兵。叔父が十七歳で特攻死しており、彼の人生と重ねて、涙が止まりませんでした。(男性)

▼興奮して、席を立てなかつた。反戦、お笑い、悲恋、

レビュー。お芝居の魅力が詰まっていた。殊にフレンチカンカンは圧巻で、感極まつて涙が出た。(男性)

▼二月例会としては、久しぶりの充実した舞台だったと思う。出演者が多かったのもその一因かと思うが、とにかく最後まで引き付けて離さない面白さ迫力があつた。中でも、菊谷栄がこれから戦地に向かう前夜の青森での場面が印象的だつた。召集されたことを、表向きには「万歳！」と叫びながら、心の中では皆決して喜ぶことのできない、そしてこれから何かを全力でやろうとする事や愛する人への想いなど全てを捨て戦地に向かわなければならぬ理不尽さが、登場人物の具体的な言葉でよく表現されていたと思う。浅草の軽喜劇の歌や踊りのシーン

も、単にレビューショーとして見せるだけではなく、物語の展開の必然として描かれており、そのテンポの良さと歌や踊りの上手さに圧倒された。登場人物では、菊谷栄役の有馬自由や榎本健一役の犬飼淳治、北乃祭役の北村由海の演技にとても存在感があつた。(男性)

▼小コントが思いのほか盛り上がりた。物語は感動的。時代をうつし、明暗あり。短時間のまとまりは拍手。(女性)

▼人を恋しく想う気持ち、人の優しさ、哀しみ、苦しみ、様々な感情が溢れている舞台で、観ている私も笑って泣いて、又笑つてと感情がゆり動かされました。レビューの場面では本物を観るように楽しくて一緒に拍手をしていました。観る者を引き付けて離さない感

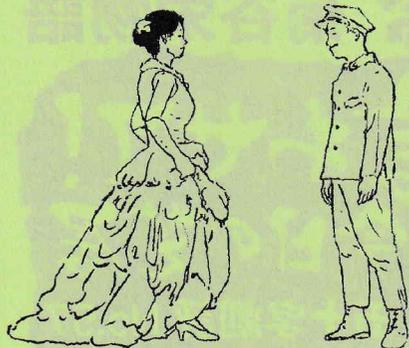
激・感動する芝居でした。

(女性)

【七〇代】

▼昨年の十月例会を思い出しながら、戦争で生命が奪われる口惜しさを強く抱かずにはいられなかつた舞台です。はつらつと演ずるキャストに大きな拍手を送ります。(女性)





▼コロナ禍で、前よりも自己責任の心が強くなっていく。「愛のない社会」、あらためて人は人の中で生き人になる。音楽の音が大きくて耳に痛かった。しかし良いいお芝居の声多し。(女性)

▼昔、幼い姉妹は父のごきげんなちよつぱり替歌の『ベアトリ姉ちゃん』で起床した。人気者エノケンの後ろに座付き作家、菊谷栄あり。この芝居では聞けなくて残念。(女性)

▼少し以前に座長の横内さんと六角さんの対談を聞いてとても楽しみにしていました。けど、ちよつとレビューが楽しすぎて、本題が少しずれてしまった気がします。

▼筋書きは暗い時代のつらい現実だけど、笑顔の元気なダンス、華やかな衣装、サーピス精神満載で「生きるために生まれてきた」との叫びが伝わってきた。(女性)

▼華やかな世界から、一転兵役召集。菊谷はどんなに伝令がうれしかったことか。ダンスにウキウキさせられた。(女性)

▼二〇二三年の幕開けが「最後の伝令」戦争の内容は暗いイメージがあったが戦時下にこんなにも明るい舞台でよいのかと観ていたらセリフの端々に検閲などの言葉

が出てきてあくそうだろうなと思った。戦争に行くのに「パンザイ」はいっつ見ても可笑しいと思っていたが「鉄砲の玉の来ない所にしゃがんでいてね」そうこれが本音だと、でも大きい声で言えない時代。久々に公会堂の舞台が狭く感じたお芝居を観た。(女性)

【年代・性別不明】
▼浅草の座付き作者が出征のため田舎へ帰る筋書き。とことん泥くさい進行。なのに、いつの間にか涙が…。だから芝居は悔れない。

編集スタッフから
五月は、春から初夏へと心ウキウキ花々も愛で、山菜も授かります。そんな中のお芝居楽しめましたか。
私は六〇年前に夢中でみていた「ひよっこりひよつたん島」を思い出しました。平日夕方五時四十五分からの十五分。「だけど僕ははくじけない 泣くのはいやだ 笑っちゃおう進め ひよっこりひよつたん島」の歌詞と共に楽しんでいました。井上ひさし「きらめく星座」もりあげて下さい！貴方の感想を投稿してください。スタッフ一同お待ちしております。